

それじゃ、釣れない。

【試読版】

～ ニュージーランドの巨大鱒が教えてくれたこと。



師である、故 馬部俊哉氏に尊敬と感謝、追悼の意をこめて。

2011年
中村太郎

著作権について

「それじゃ、釣れない。」は、著作権法に従って保護された著作物です。
本書の著作権は、中村太郎にあります。

著作者の許可無く、本書の一部、または全部を、あらゆる媒体（印刷物、e-book、CD、DVD、文書等）において複製、流用、転用、転売することをかたく禁じます。

免責事項

本書は、著作権者、中村太郎の経験に基づいた主観的なノウハウをまとめてあります。なので、人によっては違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれません。あくまでも主観的なノウハウということをご理解いただき、内容その他すべてのクレームに対して著者である中村太郎は一切の対応・回答義務が無いことをご承知おき下さい。また、**製品の特性上、返品・返金にも一切、応じません。**

また、実行する方の技量、経験、方法、環境等により、その効果や結果には個人差が生じます。本書は全ての読者の方々のスキルアップを保証するものではなく、また、ノウハウを実行する事により生じるいかなる損害に対しても、一切の責任を負いかねますことを予めご了承下さい。

尚、**本書をご覧になることは、これら「著作権について」「免責事項」に全て同意したものとします。**

目次

- はじめに
- ニュージーランド北島の釣り事情
 - ・ 60cm オーバーがぼこぼこ釣れるの？
 - ・ ガイド無しで釣りはできるの？
 - ・ ドライフライだけで釣りがしたのだけど…
 - ・ 最初に、あなたは試される
- ダブルニルフ
 - ・ 中級者と上級者の違い
 - ・ ダブルニルフのメカニズム
 - ・ 鱒の居場所
 - ・ ダブルニルフの投げ方（キャストから HIT まで）
 - ・ 根掛かりの対処法（知らないと危険すぎる！）
- 必殺パターン集
 - ・ ドライフライ
 - ・ ニルフ
- 道具について
 - ・ おすすめロッド
 - ・ おすすめリール
 - ・ ウェーダー
 - ・ アンダーウェア
- 快適で楽しい旅にするには？
 - ・ KAMI さん（神さん!?奥さん）対策
 - ・ 殺人光線にご用心
 - ・ ヘリフィッシングについて
 - ・ サンドフライ対策
- おわりに

★ 特別付録

余った時間でチョイ釣りできる北島ロトルア周辺の川を動画や写真を交えて紹介！

はじめに

この度は、本書をダウンロードしていただきまして誠にありがとうございます。はじめまして、中村太郎と申します。極端な釣り馬鹿からショップ店員、ライター、インストラクター、ガイドの経験を積んできました。<http://www.ff-taro.com>

元ニュージーランドのフィッシングガイドという経験を通して、皆様へ分かりやすく有益な情報を提供させていただこうと思います。本書で紹介する情報は、主に2つのことです。ニュージーランド（以下、NZ）で巨大鱒を「必然的」に釣る方法。もう1つは、日本でも大活躍するニフの使い方とその魅力についてです。NZ 釣行予定がお有りの方以外でも楽しんでいただけるようになっています。

さて。なぜ、私がこのようなノウハウ本を書くに至ったかといいますと、ガイドをしていた期間中、最も多く寄せられたお言葉が、

もっと早く知っておきたかった。

だったのです。その内容とは、先に挙げました2つのことです。日本で相当な経験を積み、行くところボウズ無し！という方でも NZ では全日程中の釣り最終日3日目でようやくコツが掴めるようになった、というのはザラです。あなたが、一生の内に何度も NZ へ行かれるなら話は別です。ただ、

一生に一度かもしれない。

というのであれば、このまま読み進められることをお勧めします。ただ、本書はポイントガイドブックではありませんので、そういった内容を期待されている方には不向きです。※巻末で北島ロトルア周辺にあるパブリックな釣り場紹介をオマケとしてつけますが（笑）

また、ニフを十分に使いこなせているという方にも不必要ですので、それらに該当しない方のみご覧いただければ幸いです。内容的には、読者の皆様がフライフィッシングの経験者であることを前提としており、「ニフ」という単語の意味が分かるレベルの方でしたらスムーズに読み進めていただければと思います。

尚、本書をご購入された方への特典としまして、私が行っている、ダブルニフスクールに本書購入代金 1,500 円を差し引いた特別価格でご招待したいと思います。手にした知識を体験することで、一生あなたの腕に残るスキルとして確立されてはいかがでしょうか。

私自身、NZ 渡航が大きな転機となりました。本書の購入が、あなたにとってもそうであることを願っています。

■ ニュージーランド北島の釣り事情

60cm オーバーがぼこぼこ釣れるの？

答えは、YES であり、NO でもあります。

確かに、NZ には 60cm オーバーなんてゴロゴロいます。しかも、決してヘリなどでしか行けない山奥に限ったことではありません。場所によっては、身近に行ける都市近郊の川にさえいます。しかし、ネットで NZ 釣行に関する記事を検索してみてください。皆さんが思われるほど、巨大鱒が画面を賑わせてはいないことにお気付きになるかと思います。別に大きければいいってもんじゃないというお気持ち、**少しだけ**同感です。40cm でも十分、凄まじいファイトを楽しめますし、それで満足される方が多いのも事実ですので。

でも、せっかく貴重なお休みを遣って NZ へ行くのであれば、絶対にあの

暴力

と呼ぶに相応しいファイトを味わっていただきたいのです。筋肉で盛り上がった背中が流れを逆走し、リールが悲鳴を上げると、誰しものがまず、恐怖を感じ、横たわる美しく巨大な野生の魚を眺めたときに初めて、フライフィッシャーであることに感謝します。

それでは、なぜ全てのアングララーが巨大鱒に出会えないのでしょうか。ガイドが悪いから？いえ、違います。

あなたが釣り方を知らないだけです。

別に会ったこともない、あなたに喧嘩を売っているわけではありません (笑)。日本のフライフィッシャーは世界的に見ても相当レベルが高いと思います。しかし、これはドライフライに限ってのこと。水面からほんの数十cm沈めた先に広がる無限の可能性に気付くのは、釣りが許される 3 日のうちの最終日だったりするのです。それでも、気付けばまだ良い方でしょう。ぜひ、本書を最後までご覧いただき、水面下の攻略方法をご自分のものにして下さい。

ガイド無しで釣りはできるの？

答えは、これもYESであり、NOでもあります。初めての渡航であれ、ベテランであれ、絶対にガイドを付けることをお勧めします。安全面、レギュレーションの遵守、車上荒らし対策、その他、理由は様々ですが、はっきり言ってしまえば、数日しか滞在しない我々、外国人にとって、

釣りを成立させるのが難しいからです。

本書やネット等で、どんなに知識や技術を向上させても、そこに魚がいなければ意味がありません。それどころか、地図を頼りに行ったプールが土砂で埋まっていたということもあるくらいです。情報は旬なものでないと意味がないのです。

また、NZの鱒は人に馴れていません。なので、一度、釣られてしまいますと、一週間は釣りにならないなんてこともあります。また、魚がいる場所は限られており、数キロ歩いて釣れなくても、その先は天国なんてこともあったり、何か理由があってか終日ただの1匹の魚影を見られないということも多々あるほど…。フィッシングガイドが仕事として成り立つのは、そういった背景があるからなのです。

現地の情報に精通したガイドを雇うこと。これが本書で一番最初にお伝えすべきノウハウです。

ドライフライだけで釣りがしたのだけど…

これもよくある質問であり、大変もったいない話だと個人的に思います。渇水か何かの原因でドライに反応しやすくなる夏、セミの記憶、レースウィングの羽化、それと、鱒の「気まぐれ」等によって大型の魚がドライに反応しやすくなることもありますが、それら特殊な状況を除いて、シーズンを通してドライに「出やすい」魚は40cm程度の若い魚が大半を占めます。

基本的に大きな魚はわざわざ危険を冒し、手間をかけてまで水面くんだりライズしないものです。目の前に流れてくる餌をパクリ。これが現実です。60cmを越す老獪なブラウントラウト（以下、ブラウン）が水面を割って…というシュチエーションを求められる方は、そのオーダーに確実に応えることができるガイドを探さなくてははいけませんし、訪れる一瞬のチャンスは多くはないでしょう。そういった過激なシーンばかりが注目されてNZの釣りはときに狩りに例えられます。魚を見つけてドライフライを鼻面にぼとり。狙った魚を仕留めるというニュアンスですね。

しかし、本書を手にした読者の皆様には、そのような「状況や魚の都合に合わせる釣り」をお勧めしたくないのです。

釣るべくして、釣る。

これを目指していただきます。

それがどのような釣りなのかを具体的に言いますと、ダブルニンフです。

もちろん、このテクニックは日本でも使えますし、何よりも、

NZでは、使えないと話にならない基本中の基本です。

なぜか日本では人気が無いニンフの釣りですが、実際にやってみると、その奥深さと合理性、立体の釣りのみをもたらす特有のイメージの魅力にとりつかれます。こんなに面白いのになぜ皆やらないのだろう？と思ったこともありますが、よく考えてみますと、私自身、仕事でニンフを常用するまで、その使い方を殆ど知りませんでした（笑）この認知度の低さが「ニンフは分からないから使わない」という図式を作っている気がします。

最初に、あなたは試される

ガイドは、アングラーが希望する釣り方を聞き、お客様の技量の範囲内で最大の成果をあげてもらうことが仕事です。また、仕事など抜きにして楽しく魚釣りをして欲しいと思うことはガイド共通の願いでもあります。初心者のアングラーに難しいポイントを含めた広大なフィールド全てを釣ってもらっては、時間を無駄に過ごすことになりかねません。優れたガイドは、最初のポイントでアングラーの力量を見極めます。その時点で当日のスケジュールを組み立て、効率よくポイントを選択して最高の結果を残してもらえよう最大限の努力をするのです。

また、ガイドの努力に加え、あなた自身が技術をもってトライすることにより、数日間の釣行は忘れることができないほどの素晴らしいものになるでしょう。私の経験上、「自分が投げやすいと思う距離」から、フライを魚の50cm上流に着水させ、50cmナチュラルドリフトさせられれば、ドライフライで困ることはないと思っています。もちろんそこまでできなくても十分、釣りはできます。ガイドが適したポイントへ案内しますので。ただし、はっきりと言い切れることがあります。

ニフを使えるようにしておいた方がいい。

どんなにドライフライ中心の釣り場であっても、ここぞという時にニフが強られる場面もあります。例えば…

丸一日、釣り歩き、40cmほどの魚をドライで数匹キャッチ。明日はもう帰国しなくては行けない。釣果にはそこそこ満足はしているものの、何か物足りない…という時でした！プール手前の流れに70cm近いレインボートラウト（以下、レインボー）が定位しているではありませんか！ひょっとしたらドライで出るんじゃないか？と思った時、ガイドは迷わず小さなニフを勧めました…。

結論から言ってしまうと、その場合、勧められた小さなニフでしか釣れません。もし、ドライフライを投げていたら、バイトするどころかアングラーの存在に気づき、その巨体をどこかへ隠すでしょう。ようやく手にした千載一遇の機会を逃すと同時に、釣り方に幅をもたせる必要性に気付くでしょう。

これは結構、精神的に辛いものです。

■ ダブルニンフ

中級者と上級者の違い

私個人の定義ですが、経験もそうですが、何よりも釣り方のバリエーションの幅が決定的な違いであると考えます。増水でドライが使えない時は代わりとなるウェットやニンフに切り替えたりと、その状況に応じて的確な判断ができるということです。

技術は、まず知識として吸収した後に実戦で培われるものでありますが、巷にはドライの教本は溢れていても、ニンフ、とりわけNZ釣行での基本となるダブルニンフに関しては殆どありません。経験豊かなアングラーであれば、ガイドから習い、身に付けることができるかもしれません。しかし、現地で体験するダブルニンフは、そのベテランにとっても、

初めての経験なのです。

知識の吸収と実戦での訓練。これを同時に強いられることはベテランにとっても難しいことなのです。しかも、釣行日数はわずか数日。つけ加えるならば、その中でどれだけのチャンスがあるのか…友人と代わる代わる竿を出す釣行であれば尚のことです。

思うように釣れない焦燥感、蓄積された疲労…。

それは確実に釣果にも反映されていきます。

ところが逆に、知識と技術を身に付けた状態で臨めばどうでしょう。フライフィッシャーであるあなたにすら理解していただけるはずですよ。

また、前述しましたが、この知識と技術は、レギュレーションさえ許される場所ならば日本国内でも再現できます。(ダブルニンフの使用が可能な管轄漁協にお尋ね下さい) 増水、濁り、低活性等であっても確実に善戦できる技術を身に付けることにより、あなたの釣りから益々、死角が減ることになるのは間違いありません。そして、ニンフに対するマイナスなイメージを払拭させることもできます。やってみて実際に釣れるとなると、かなりハマります。独特な水面下の世界をたっぷりとお楽しみ下さい。

随分くどくどと前置きが長くなりましたが (笑)、いよいよ本編に入りたいと思います。

※ 試読版は、ここまでです。続きをお読みにになりたい方は、shop@ff-taro.com まで、ご連絡ください。(本体価格 1,500 円)